

社会福祉における宗教

—— 歴史的関連と現実的対応 ——

菅
蔗
寂
泉

はじめに

社会福祉の発達史上において宗教は社会福祉と何らかの相関的、或いは補完的關係を保ちながら提携してきたことは事実としても現代社会において国は一応、国民の社会福祉に対する責任を認めているのであり、例えば寺院・教会等、宗教的団体が基盤となって営まれている社会福祉施設等の活動をとりあげてみても、そこでは「信仰の自由」の保障と、「サービスにおいて公立と民間の間に差違があつてはならない」という理念から現実的には宗教的活動は制限されているのであつて、その意味から公営の社会福祉施設と比べて宗教的団体を基盤とする社会福祉施設が宗教的特色を特にもっているとは云い難い。

このような事実からしてもわかるように現代社会においては、この宗教と社会福祉という両者の關係はかなり不明確なものとして並存しているのである。

そこで時には宗教の社会福祉における歴史的功績を掲げることによってその分野での宗教の存在の意義をと見え、或いは現実にはそれらが存在しているという実体的事実からそれを捉え、そこに解釈を加えてゆくことが行われている。しかし、それらの解釈の限りにおいては現在の存在価値をなんとか説明できたとしても将来における存在の意義ある必然性は決して生まれてくるものではない。

宗教的に動機付けられた社会福祉の将来について、デビッド・マカロフ (David Macarov) は「数多くの要素は社会福祉のための宗教的動機によって演じられた役割りは将来的に減少する」⁽¹⁾と強調している。

その理由として氏は以下の三点をあげている。「一、増えつつける社会の複雑化であり、それは増加している社会

的問題の複雑化と相関々係にある。社会福祉機関はたぶんその規模や視野及び包括力をのばし続けるであろうが、ここでは施与者と最後の受取人の間にかつて以上の距離がおかれることとなり、それ故に宗教的に動機付けられた活動のそのような制度化は寄附が増えつゞける間でも急激に減少の一途をたどるであろう。二、ある宗教的社会福祉活動の布教的態度については世俗的サービスの恩恵の中の疑わしい宗教的なサービスであるとして拒絶をうけるという政策的に知り得たことをとりたてていうのではないが読書能力と理解力が成長したとき、概ねそのことが明白となってくるであろう。三、人種・性別・国民性・或いは宗教的基盤上の識別を禁ずる法律はたぶん広げられてゆくであろうし、宗教的機関はそれらの存在理由が弱くなるが故にメンバー以外の増えつつある人数を処理するであろうという結果を強要せられることとなる⁽⁹⁾。」としている。

まず、ここで第一点に示されたところは社会福祉におけるリーダーシップの問題とその勢力範囲であって、それは歴史の早い時期においては、その主たるものが宗教活動によって担われ、それを後から支えるものとして従の位置に国の政策があつたものが現在ではその主従関係が逆転し、更にその差が拡がりつつあることを示すものである。又、第2点では一般に宗教的社会福祉活動と目されている活動も実のところは国の社会福祉政策による公的費用（我国の場合は措置費・委託費等）で行われているところの公的な社会福祉活動にすぎない。そこでこれらの費用に依りながら行われる社会福祉活動が一方において宗教的社会福祉活動と称し、その宗教の布教に利用している事実が、いずれは一般大衆の批判をあびることにつながるであろうということである。第三の点について、我国の場合は既にここに説明される域を脱しており、法律は人の識別を禁じているし、又それを理由に宗教的機関がそのサービスの提供を拒むことはできないのであって、既にそれだけ社会福祉における宗教の存在価値を失っているといえる。

それでは何故に宗教は現代社会においてまでも社会福祉活動にかかわる必要があるのだろうか。

この点について氏は「他方においては社会福祉を指揮する神の命令は宗教の不変性によって同じく不変の如く見做されるであろう。そして人と社会が社会福祉において契約——その数は増え、或いは減り、一つの方法で、或いは他方法で——する主な理由の一つは神の意志を全うすることへの願ひでありつゞけるであろう」⁽³⁾と述べているのである。それは宗教のもつ超歴史性であり、そこに展開される時間を超えた宗教的義務観であるといえるのであり、宗教者にとっては殆んど不変のものであるとしてまちがいないであろう。

そのようにみてくると、先の社会福祉における宗教的動機によって演じられた役割りの将来的減少と、この超歴史的な宗教的義務観の間には現実的に矛盾を生じることとなる。

この両者の矛盾をどのように考え、捉え、対応してゆくかが宗教と社会福祉の今後の課題であり、最も困難な哲学的実践問題となつてあらわれる。

本論においては社会福祉発達史を再考察することによって現代における宗教と社会福祉の関連を客観的にみたうえで、結論を仮説的に云えば宗教と社会福祉の分離の上で宗教の役割りの再構築という形の一例としてスピリチュアル・ニーズとそれへの対応をとりあげ、以上掲げた課題の解決からは程遠いとしても社会福祉における宗教の実践上の関連の考察を試みようとするものである。

第一章 歴史にみる宗教と社会福祉の関連について

今、一般的に理解されている社会福祉の歴史をみると、その発展は慈善事業→社会事業→社会福祉（事業）の流れとして現象的に捉えることができる。

しかし、その現象的事実を拠所として現代社会における社会福祉（事業）と慈善事業の基盤となる宗教活動とを同一線上において短絡的に結びつけることは早計であると考ええる。

本章においては、その理由として社会福祉の発展史上における公私の分離の事実をとり上げ考察する中に宗教と社会福祉の関連を再検討したいと考える。

一、宗教の独占物としての社会福祉

殆んど全ての宗教はその教義、或いは宗教的実践活動の中に社会福祉的实践、つまり慈善活動に携わることを従者の間に義務付けてきたのであり、歴史の早い時代においては、それらが社会福祉活動において中心的役割りを果たしてきた。そのことの個々については、今更ここでとりあげるまでもなく明白な、或いは歴史的な事実として今まで紹介されてきたとおりである。

しかし、ここではそのような歴史的事実は事実として認めながらも、宗教が社会福祉において中心的役割りを演じていた。そのような時代について、その社会的・政治的な背景を捉え、その時代において、何ゆえ宗教が社会福祉において、その中心的役割りを演じねばならなかったかの因果関係を考察する。

まず社会的背景を考えるならば、その時代においては社会福祉ニーズが未だ社会的に承認されるに至らず、依って世俗的機関の対応策とはならなかった。これに対し、宗教はその人道主義的立場よりして、これに卒先して対応していたことは一般的に理解されるところであらう。

しかし、ここで更に重要なことは政治的機能において宗教と世俗が分離していなかった事実をとりあげるべきであると考ええる。

つまり「宗教的な権力と世俗的な権力が一つであった時、権力と実活動の混合は相対的に重要視されなかったのであり……略……社会福祉は政府の本来の責任というよりも宗教の本来的義務とみられていたのである」と、⁽⁴⁾

また、仮に宗教の権威と世俗のそれが形式上分離していたとしても「政府の社会福祉関係の担当大臣は例外を除けば国の発端以来殆んど政府との提携という形で宗教的当事時に割りあてている」⁽⁵⁾とマカロフ氏の指摘するところであり、このような条件が社会福祉を宗教の独占物としていたのであると考える。

さて、社会福祉において宗教が負請ってきたところの活動、それは当初は個人的な慈善活動であったと考えられるが、やがて先に述べてきたような条件のもとに発展してゆくのであるが、一方において、その規模の拡大は宗派の内部又は外部で合理化され制度化される必要にせまられることとなる。

そのような慈善活動を中心とした制度化の動きは宗教機能と世俗機能の分離が明確でない中世社会において、社会福祉（救済）活動を宗教機能の独占物から世俗機能へと押し動かし、結果、世俗的機能の中に制度化を産み落とすこととなった。その著名な例としてはC・O・S等の活動を掲げることができよう。

この流れは一般的に慈善事業から社会事業への発展として、或いは民間団体の政治機関へのソーシャル・アクション機能として、評価・理解されているが、そこには中世の宗教と世俗の機能の分離が明確でなかった時代から、その両者の分離の事実をふまえた理解が要求されなければならないのである。

二、社会福祉における宗教と世俗の分離

それは政治における宗教の権威の低下と不可分の関係にある。

「革命や市民改革によって教会の社会的地位が低下し、又は根絶するときは教会に負請われたいくつかの社会福祉

活動が国家と争い、又、強化された教会をひっくり返すかのようにみえるであろう。少なくとも近い将来、共産主義革命を経験するであろう国はこの兆候を示すのである。もし教会が、若しくは特別の宗教が初期の、或いは過去の圧制者とみられるならば、又はそれが植民地パワーでもって立証されるならば、そこには宗教が社会福祉において期待できる拡大性に身近かな限界をもつことになる⁽⁶⁾」そして、そのような例として独立後のインドにおけるキリスト教排撃運動⁽⁷⁾——それはキリスト教社会の同一主義の確立に対する非難であるが——を掲げることができる。

結局、社会福祉における宗教と世俗の分離は社会福祉における両者の慣例的な相互役割りに大きく影響し、結果としては「教会と国が完全に分離している国では社会福祉は政府の独占的義務となり、専ら宗教的法人団体に割りあてられるであろう」⁽⁸⁾又、漸時「それらの間の活動の範囲は時に分割するか、或いはしないか、いづれにせよ併行的なシステムによって管理運営されるであろうし、政府と宗教団体によって相互作用的に操作されるであろう」⁽⁹⁾とマカロフ氏は述べている。

又、アメリカの例をみるならば「教会と国の分離は教会の努力をはっきりと私的なものとした……」⁽¹⁰⁾という見解もみられる。

これらの説明から社会福祉の発展は社会福祉における宗教と世俗の分離の問題に絡んで当初の宗教の独占物としての社会福祉から世俗の独占物としての社会福祉へと一八〇度の転回をもって結果的に進むこととなる。

三、社会福祉における宗教と世俗の新たな展開

今まで述べてきたところの見解によれば社会福祉において世俗がその独占的位置をしめたが故に、最早や宗教は社会福祉において果たす役割りは無いこととなる。

ところが、社会福祉における宗教との関連は世俗の独占という形で終止符をうつことなく、更に新たな展開の局面を迎えることを余儀なくされる。つまり、それは大恐慌というエポックの存在とそれへの対応という形で現われてくるのであるが、「社会福祉における教会と国の関係の問題は大恐慌下のアメリカにおいて新たな広がり時期を迎えた。そこでは宗教的と世俗的の両者について現存している社会福祉体制では問題が大きすぎて処理できないことを確認させられた」⁽⁴¹⁾そして、それへの対応として「社会福祉分野への政府の介入は先の問題の鋭敏さに次の疑問をもち込んだ。即ち、弱くなっているボランティア体制の費用支出の点で政府の改良運動を助長し教会と国の分離を破ることの危険性の点で宗教的なグループに対して政府の基金を要求し、又、彼らのメンバーの為に宗教的体制を確立し、メンバー以外のものの世話について政府がこれを行うということを認めさせる方が良いのではないかという疑問である。これに対し多くの討議と考究が一九三〇年代より五〇年代を通じて続けられ、やっと一九六〇年代に社会福祉計画の第一次政策として政府の役割りが十分に確立されたボヴァティー・プログラムの構想がまとまった」⁽⁴²⁾のである。この過程については要約すれば、大恐慌への対応策としての社会福祉政策の立て直しであり、それにより宗教的団体へも援助金をあたえ大いにこれを活用して発展を助長するものである。

しかし、この構想の実際のねらいとするところについて「事実、政府からのお金の受け入れは教会と国の分離を破るものであり、宗教的活動を世俗がコントロールする為の方法を用いたものであると見做される」という反論が存する。⁽⁴³⁾以上、見てきたように社会福祉と宗教の関連は当初、その独占的役割りを宗教が担っていたものが、宗教と世俗の分離により世俗的機関にとって変わられ、更に、その下で宗教的機関が機能するという形に変化してきたのである。

現在における社会福祉と宗教の関連について、これを考察する時、この現在における社会福祉における宗教の位置を考察過程に加えた理解が必要と考えるのである。

以下の章には、この理解をふまえた上での社会福祉における宗教の対応について考察を試みる。

第二章 社会福祉の公私分離における宗教の役割り義務

社会福祉における公私の分離が進む中で各々の宗教宗派はそれ独特の対応の見解をうち出してきた。

この章においては主なる宗教宗派の対応について述べることにする。

まずカソリックの見解をみてみると「個人や教会グループの手におえないものは別として救いに必要なものとしての善行が社会福祉に携わることへの機会を絶対的な必要物にしたてあげたのである。そこでカソリックは『補充(Subsidiarity)の原理』をうち出した。それは小さな単位の問題やそれらの各部分については個々人がこれを成し遂げること。更に出来るだけ多くを成し遂げるのであるが、彼らが一人の手で成し遂げられないより大きい、又、高い次元での社会的問題についてのみこれを放棄することができるという原理である」⁽⁴⁾

いっぽう、ユダヤ教の場合は、その見解は全く複雑なものであるが、それは多分にユダヤ人の存在可能性にかかわったものとして考えられる。つまり「ユダヤ人は個々人としては政府が社会福祉問題进行处理すべきであると感じているけれども組織化されたユダヤ人のコミュニティは世俗的な政府の干渉を恐れてきた」⁽⁵⁾のであり、その意味から社会福祉における公私分離よりも自らを守るという態度に終始しなければならなかった。

仏教の社会においてはここでとりあげることは適当でない。なぜなら「仏教にあっては浄仏国土、成就衆生といわれるように、国土や衆生から離れて宗教が成立するわけではない。仏教は国土に代表される制度、政策をめぐって、そこに丸ごと『浄仏国土』を試みるか、あるいは癒着をするか、逆に『出家否定』を媒介として絶縁するかの方向を

とりがちであった。そのような方向に重要な宗教的特色もあった……⁽⁶⁴⁾」というように公私分離ということは社会福祉を含めて問題とはならなかったのである。しかし、これを今日的な現実社会の中でみるならば理想をいづれにおこうとも実際上は社会福祉については公私分離という現状は存在するのであって、その意味から実践上の課題としてその対応力と説得力において力に欠けるといわざるを得ないこととなる。

プロテスタントの見解は社会福祉の公私分離及び、それを事実として是認した上での役割り分担において最も興味深く実践性の上において充分な説得力をもちうるものと考えられる。

つまり「アメリカでのプロテスタント教会の伝統的姿勢は人の『魂』に関すること、それは魂の救済が信仰上の第一義にすえられるからであるが、そして精神の慰みである善行に関することが宗教的職務である⁽⁶⁵⁾」としている。又「著名なプロテスタントの思想家は社会福祉において教会が果す役割りはないという姿勢を繰り返した。この見解に加えてプロテスタントの神学者によって伝導された見解もある。それは国がその責任を認めるがゆえに放棄されるべきものであるが教会は開拓的役割りをもっているということができる。次につづく文はニーバー(R. Niebuhr)によって発表されたものである。『社会事業のフィールドの開拓と社会がそれとして未だ認めないところの責任を発見すること、しかし、この場合いづれ、それへの社会の責任の一般的承認があり、その時点で社会にそれらを護歩することになるが、これらが教会の業務である。又、理論よりも実践においてより明確な第三の見解がある。

それは、もし教会や宗教的団体が社会福祉活動の中に宗教的職務として携わるべきでないにせよ、いわば世俗的にプロテスタントの組織は人道と世界的状態にはかかわるべきである⁽⁶⁶⁾』」としている。

このプロテスタントの見解を整理してみると、宗教の社会福祉へのかかわり方について、一、社会福祉とは本来世俗的対応問題であり、宗教の本来的任務は人の「魂」に関することがその第一義である。二、社会福祉が世俗的対応

問題であるとしても、それへの開拓的役割りは宗教も又、担うべきである。三、世界的レベルにおいて宗教的ヒューマニズムのもとに世俗政策を越えてこれに対応していく。の三つをあげることができる。

この見解は、先にも述べたように社会福祉における公私分離という現状をふまえた上での対応であり、そこに十分な説得力をもちうるものと考えられる。

次にこの見解をもとに実践における宗教と社会福祉の関連を見てみよう。

第三章 老人サービスにおける宗教との関連

社会福祉サービスにおける宗教的サービスの必要性について老人の生活との関連の中でとらえてみよう。

興味ある研究はフランシス・ジェファー (Frances C. Jeffers) とクラウド・ニコルス (Claude R. Nichols) の「老人の健康に対する活動と満足度の関連」⁽⁸⁾にみることができる。

この研究はデューク・ユニヴァシティー・メディカルセンターの行った老人個々の身体機能の受容性と老人の活動 (Activity) と満足感 (Attitude) についての調査結果にもとづくものである。

結論的に研究のサマリーを引用してみると「障害を伴わない老人は各々軽い、又は重い障害を伴った老人に比して総合的満足度と活動において高い点数を示す。しかし、宗教的活動を除いて全ての活動は確実に、そして明白に身体的機能に関連しているにもかかわらず、満足度においては身体的機能に確実に関連するものと不確実に関連するものと二つの分離した範疇が存在する。そしてそこには宗教に対する満足度が逆に重要な関連をもって現われてくる」⁽⁹⁾と述べている。

問題の焦点を更に明確にさせるため、今少しこの調査研究についてみることにしよう。

この調査はノース・カロライナに住む六〇才以上、二五一人のコミュニティ・ボランティアのグループにおいてなされたものであり、調査項目は活動と満足感についての質問形式の面接調査にもとづくものである。

質問の内容は活動項目について、a、親密な接触（家族・友人）、b、余暇（時間の過ごし方、趣味、娯楽、組織への参加）、c、保障目的（現在の仕事の地位、家事や経済的圧力を含む）、d、健康問題、生活の困難さ、e、宗教的活動（宗教的サービスへの出席、テレビ・ラジオの宗教の時間の傾聴、宗教関連図書の読書）の五つの項目について二〇の質問事項を挙げている。次に満足感については自身の活動と社会的な位置（それらは友人、家族、労働、宗教、健康、経済的状态、一般的幸福感、有存在感）についての満足度に関して五六の質問となっている。

調査結果についてその内容を概略的にみると

- 1、健康老人は障害をもつ老人以上に活動において高い総合点を得る。
- 2、満足度においては健康老人は障害をもつ老人に比して高い総合点を得るが活動における程健康状態は関係しない。

- 3、高い総合得点は確実に総合的な満足度と関係する。

- 4、宗教活動を除いて全ての活動は非常に確実に身体的機能と関連している。

- 5、活動との比較において満足度の範疇では身体的機能度に関係するものは何もない。又、宗教的満足度についての高い点数をもつ個々人の大多数は身体的に障害をもつ人々である。

- 6、活動と満足度の高点数は確実に関連している。

以上は老人の活動及び満足度の相関々係を示すものであるが同時に宗教と老人の、いいかえれば老人のスピリチュアル・ニーズとその対応の必要性についての興味深い結果としてみることができる。

この両者の関係について先の研究者は調査結果より「老人の満足度の……宗教的品目に関連して、宗教は人生の終末のアプローチと年の流れとして、それら（身体的状態）以上に意味があり、殆んど老人の課題の基本である。特に障害を伴った人のために、何故なら、彼らにとって終末はより急迫したものであり、従って彼らは宗教の慰めと快楽により接近したがるようになるからである……」⁽⁶¹⁾としている。

この調査研究は定量的に老人の生活における宗教との関連を示すものとして、ここにとりあげたのであるが、次篇章をかえて老人の生活における宗教、つまりは、老人のスピリチュアル・ニーズとそれへの対応という形で社会福祉サービスの中での宗教活動の実践について考えてみたい。

第四章 宗教的サービスの実践について

——老人のスピリチュアル・ニーズとそれへの対応——

例を老人にとりながらスピリチュアル問題とその解決について宗教の対応をみていきたいわけであるが、この老人のスピリチュアル・ニーズについては一九五三年夏の、教会と老人についての国際会議において注目を浴びた問題である。（一九五二年老年国際会議のレポート“Man and His Years”⁽⁶²⁾ 所載）

ここでは八つの基本的なスピリチュアル・ニーズを掲げ、それらへのキリスト教会の対応について述べられている。ここで、それらを概略的にとりあげ、その対応をみていこう。

老人のスピリチュアル・ニーズとその対応には

一、絶ざる神の「愛」の保障へのニーズ

神は人々の創造主である事実から彼の生涯を見守り守護し、更に彼は福音によって聖なるキリスト教会の中でキリ

ストの身体の一部として、いつしか天国で神の子として崇高で偉大な人生の中に召されていく、つまり人生そのものが神との係わりの中にあり、その意味では若きも老いも神の限りではなく、神の「愛」によって支えられていることを聖句より教示していくことが必要であり、スピリチュアル・ニーズの基本であり、その対応である。

二、人生が神により確かに守られていることの保障へのニード

人々の人生には裕福な時、貧乏な時、又、若年と老年がある。それらすべては神の継続的意図の描写である。

我々は偉大なる「フェアー・アウト」の聖句の一節をもつ、それは安定に満ちた約束の黄金の鎖をつくり、神は決してその存在をひっこめることのない保障を与えるものである。

三、罪と苦悩と恐怖からの救済へのニード

例えキリスト教徒といえども人生の終末期——身体的・精神的に衰えつつある時——には罪の感覚をもつのが一般的経験である。

我々は神のおふれるばかりの恵みの中に罪を防御する。又、復活の望みの中に悲しみに対する答をもつ。そして我々は聖句の如く恐しさに対して全能の武器をもつ。パストウラル・ケアー (Pastoral Care) において聖句のメッセージをもつて救済を行うことは全教会とパスターとしての教会メンバーの責務である。

四、寂しさからの救済へのニード

古い詩の中に「我々は神が心にある時は決して一人ではない。友として隣り同志に座って話をする時、我々が人生の早い時期には発見できなかった日々の意味と神のことばがつながってくる」としている。

老人の寂しさへの救済にはキリスト教会サービス、教会の信者組織、聖書学習会などを通して対応していくことができる。

五、神の抱擁と永遠の人生への展望に対するニード

「全ての後、人生は彼らに對して、又、他人に對して重荷となる」とするキリスト教の誤った見地がある。この誤った見解に打ち勝つことは教会の教育活動の一課題である。

多くの人が人生の困難な仕事より退いて残りの十年二十年をより注意深くみる時、それは楽しく生きることではなければならない。人生の苦しい時期は建設的手段の投資である。それ故、教会は教えねばならない「汝ら老人の顔を誇るべきである」と。又、彼らには生活の満足感を保持できる行動感覚をもたせるべきである。それは天国への希望を保持することであり、その喜びをはのぼのとさせることである。

新約聖書はキリストの天国への誉れある約束で満ちている。そして、そこではクリスチャンのメッセージが神とともにこの人生として永遠の特有の見通しを人々に与えるものである。

六、新しい経験を通しての継続的な精神成長へのニード

老人福祉の分野で働くワーカーは「教育途上」ということは老人のプログラムの一部として重要であると主張する。それは教育的性格の種々なる活動を通じて心の窓を開けておくことなく、我々は十分に老人にサービスできないことである。その意味では教会は精神成長の外的刺戟、手引、目的を用意できる。

例えば聖書の読書、特に老人向き学習のコース、教会機関誌、ミッションナリー教育プログラム、ラジオ・テレビの宗教の時間等である。

そして全世界の教会が協力して視聴者の興味を生きたものに保つことを助けることである。

七、人として人生における満足できる位置へのニード

ここで再び、キリスト教は基礎的教育を供給するものであり全ての人々は神の見地において重要物である。そして

老人は特別な名譽の為に選ばれた者である。つまり、個々のクリスチャンは神の家族に属するのであり、その中で、老人の助言は家族の爲、地域の爲に歓迎されて使われるべきである。特に教会は老いた人の心の位置付のためこの願望を満足させるに十分な役割りを果たせよう。

八、継続的有用感へのニード

キリスト教会が老人に継続的に働きかけること、それは彼らにステータスを与え、新たな精神の成長を与え、時間と永遠の爲の適当な見通しを与えることである。聖書の精神的なメッセージを伴って感情的不安をとり除き、更に神の愛と保護を強調する中で教会会衆の仕事の中に老人メンバーをとりたてるべきである。

と老人の八つのスピリチュアル・ニーズとそれらへの教会の対応が掲げられている。

そして最後に「ミニスターと彼の人々は、これらのスピリチュアル・ニーズの本質的目覚めを獲得しなければならぬ。そして、純粹の言葉以上のものを伴って老人に接さねばならない。教会と会衆は老人に対してキリストの愛と純血の譽れを反射しなければならない。それは聖句の暗唱以上に強調されるべきものであり活動によってのみ示されるものである……」⁸⁹とまとめている。

以上はキリスト教会の立場での老人サービスへの対応に関する考え方であるが、それでは、これらがどのような形態で実際のサービス活動の中で実践されているのであろうか。

つぎに、ささやかな体験をふまえて考察したい。

まず筆者が実際に実習経験のあるエベニザ・ホーム・ソサイエティー⁹⁰ (Ebenezer Home Society) の場合をみると、これはルーテル教会組織の手になるものであり、そこでは「人は皆、神の愛によって創造された個々人であり、生涯におうつ Physically, Emotionally, Spiritually, に満足が預定されているものである。」として、その各々に

対応サービス部門を設けてサービスにあたっている。本論の一課題であるスピリチュアル・ニーズに対しては独立の一専門部門としてチャパレンシー・サービス部門を設けこれにあたっている。このサービス内容は施設内礼拝堂での教会サービスの他、一人一人を対象としての心の悩みに関するカウンセリングや教会教育活動などである。

又、同様の例はマソニック・ホーム・アンド・ホスピタル (The Masonic Home and Hospital) においてもみられ、特にここでは前に掲げた老人のスピリチュアル・ニーズについてサービスする専門の若い牧師の養成に力を注いでいる。この養成プログラムについての詳細は別の機会にゆずるものの、このプログラムはマソニック・ホーム・アンド・ホスピタルの私的養成プログラムではなく、既に一九六七年以来、エール大学神学部との提携により行われているものであり、対老人のフィールド・ワークを課した実践的プログラムである。

ここでは例を老人サービスにのみ限定したが、人間のスピリチュアル・ニーズとその対応については以上の通りに見ることができよう。

結 論

宗教と社会福祉の関連について、本論ではその歴史を再考察することにより現代の社会福祉における宗教の位置を確認し、その上にたって宗教と社会福祉の役割り分担を再確認、一応その意味では妥当と思われるところのスピリチュアル・ニーズとそれへの宗教の対応についてみてきたのであるが論の構成の過程において、いくつかの問題が浮び上がってくると思われる。

ここではそれらの問題をとり上げ少しく説明を加えておく必要があろう。まず、はじめにことわっておく必要のあることは言葉の問題であらう。

この論においてはいかにも不用意に「社会福祉」ということばを使用している。特に、ここで問題となるのは以上みてきたようなスピリチュアル・ニーズとそれへの対応に関する宗教的サービスが果して、社会福祉の範疇に入るべきかどうかの疑問である。

ここでは「社会福祉」ということばの概念は非常に広い意味に解して使用している。それは、今までのソーシャル・ワーク、ソーシャル・ウェルフェアの語としてよりも、むしろ現在アメリカで殆んど使用されるようになったヒューマン・サービスという概念においてこれを使用したと考えていただければどうだろうかということである。

次に問題となるのは社会事業史上における宗教と社会福祉の関連性についての理解である。本論においては時の流れの中で両者の相関々係を捉えた上で社会福祉における宗教と世俗の分離の事実の中に新たな役割り分担を再確認するという前提のもとに以下の章を綴るという形を試みたのであるがこの歴史の把握の方法以外にも両者を並行して捉える理解の方法がある。

つまり、上田千秋氏によれば「……現代社会においても慈善は明らかに存在するし、たとえば慈善鍋が社会鍋と改称されたとしてもその宗教的慈善の性格は変わることはない。

人間の愛の発現形態として慈善を主観的倫理的動機からみつめる限り、慈善は時代と体制を超越してその存在価値を認めざるを得ないこととなる……」⁸⁰⁾としている。

これによれば社会福祉と慈善事業はその発生以来、全く別のものとして存在しているのであって、この見解は宗教の現代社会福祉における存在を考える場合はむしろ都合のよい考え方を引き出す根拠となり得よう。

事実、マザー・テレサの来日講演は現代社会に生きる慈善事業そのものであったという印象をうけたのは筆者だけではなかったと思われる。

いずれにせよ、社会事業史の流れの中での慈善事業→社会事業→社会福祉という一連の発展的理解には疑問が残るのであり、その限りにおいては最早、社会福祉における宗教の将来性は何一つ見ることはできないのである。

以上のことをふまえた上で本論を再びまとめてみるならば、それは歴史の再考察の上にたつて社会福祉における宗教の位置づけと今後における役割り分担の明確化にその主眼をおいた。換言するならば社会福祉サービスにおける各々の役割りの専門化の一つとして宗教を位置づけることであって、その意味において将来も又、その存在が保障されるであろうという前提にたつ。事実、アメリカにおける傾向として前述してきたところのスピリチュアル・ニーズは老人のもつ基本的ニーズの一つとして数えられ、権利として保障されつつあるといえる。⁸³⁾

但し、最後につけ加えておかねばならないことは、今まで考察してきたところのものが西欧諸国、とりわけキリスト教文化圏での問題であり、対応の形態であった。残念ながら、我国においては、そのような研究及び実践の例については浅学の筆者の知るかぎりこれを見ないのであり、又、西欧諸国のそれをそのまま応用することは文化背景の相違からして適当ではない。さらに、その実践においてはスピリチュアル・ニーズとその対応の問題だけで解決できるものではなく、そのサービスの確立の為に、前提として経営組織そのものにも及んでの相違点の研究及び実践について考えていかなければならないものであり、それらは今後の研究課題ともなり得ようと思えるものである。

註

- (1)～(3) D. Macarov 著 *Design of Social Welfare Holt, Rinehart and Winston* p 92
- (4) 前掲書 八二頁。
- (5)～(6) 前掲書八三頁。
- (7) 前掲書八三頁。アーザードのインド独立運動における活動。
- (8)～(10) 前掲書 八三頁。

- (11) 前掲書 八五～八六頁。
- (14) 前掲書 八五頁。
- (16) 吉田久一著「仏教とボランティアズム」佛教福祉第五号二五頁。
- (17) D. Macarov 前掲書 八四頁。
- (19) “The Relationship of Activities and Attitudes to Physical Well-Being in Older People”
Normal Aging “Reports from the Deeke Longitudinal Study 1955~1969” edited by Erdman Palmore Duke
Univ. Press p.304~p.309
- (20) 前掲書 三〇八頁。
- (21) 前掲書 三〇八頁。
- (22) Oscar E. Feuchr 編 Helping Families Concordia Publishing 1960 p. 279
- (23) 旧約イザヤ書第四章の一〇参照。
- (24) 新約ローマ人への手紙、第五章二〇参照。
- (25) 新約コリント人への第一の手紙第一五章参照。
- (26) 新約ローマ人への手紙第八章参照。
- (27) 旧約レビ記第十九章三二参照。
- (28) O. E. Feuchr 編 前掲書二八二頁参照。
- (29) 拙著「アメリカで見た老人福祉」佛教福祉第七号二二五頁。
- (30) Preparing Chaplains to Meet the Needs of Older Adults Louis Lerea, Ph. D. and Richard T. Diekman. M.
Div. Aging July-August 1980 p. 32~p. 33
- (31) 上田千秋著「社会福祉と関連政策」
浦辺史他編 社会福祉要論 七〇～七一頁。ミネルヴァ書房。
- (32) Lloyd J. Mart 著 “How Does Pastoral Care/Spiritual Care Fit Into The Long-Term Care System?”